

(西谷彦三郎続き、東田りん)

高い山から

たかいやまから、たにそこみれば、うりやなすびのはなざかり、あれはいどんへ、これはいとんへしよ、とゆうたがごだいますが、ハれへが、ハかりませんけれども、ほかのをかたのよふなるんまい事ハ、とてもでけませんけれども、ちよいとしと事だけ、ごそだんさせていたゞきますが。これハみなさん、どふゆ事に、をもて」(24ウ)

くださりましよど。ハれへハ、ハかりかねますけれども、これハ、ハれへの事やとももいますな。たかいやまともをしますのハ、てんよりたかいやまハごだいません。てんに八月日りにん〔兩人〕いやしやります。また、したにもごだいます。すへてやまとゆうものハ、たかいものでごだいます。またたにそこと」(25オ)

ゆうものハ、ごしよちのとふり、ひくいものでごだいます。またハ、にんげんのうちにも、たかやまもあれば、たにそこもごだいます。だいさんかや、をかねのあるひとハ、たかやまでごだいます。また、ひへなんじゆもたにそこでごだいます。そこで、ハれへが、たかいところをめぐをつけて、かないませんが、みなさんハさよふな事ハごだいませんが」(25ウ)

うりとゆうものハ、つるハじこうはうものでごだいましよ。それでも、きれなはなもさげバ、うりもよなります。つるハなんぼでも、じいをほふていきます。また、なすひとゆうものハ、ごしよちのとふり、きいむらさきなら、はあもむらさき。はなもむらさきでごだいましよ。さすれば、やはり、なすびもむらさきでごだいますやろ。」(26オ)

そのなすびのへたハ、しほ〔四方〕にでゞます。はなもしほにひらいてさきます。そこで、このをやさんハ、しほしよめんでごだいます。てんにむらさきのくもがあると、ゆ事をきいてをります。そこで、月日をやさんバ、むらさきのくものなかで、すまいしてゞくださるりかいから、なすびもむらさきでありますやろ。にんげんハ、あう」(26ウ)

のかんよふにして、うつぶいて、とふりさいすれば、みじよふの、かりものもとんへと、いごか〔動か〕してくださるやろ。またハ、くハいけ〔会計〕も、つご〔都合〕よふさして下さりましたなら、あれもよい、これもよい。これが、はれはいどんへ、これはいとんへ、かとももいます。ハたくしハこれでをひまもらいます。」(27オ)

教祖の仰せにハ

をやさんのをふせにハ、このせかい、このにんげん、どふゆことからなりたちたやら、よふしろまいと、をしやるのでござります。もとへはじまりハ、月日よりふにんして、二四のりではじめ、三のりでかためてきたのやで、とをしやる。そこで九のりではじめハ、二二ヶ四、三のりでかためてくだされたりでござります。二三ヶ六とゆへハ、六だいの神のりともきかしてもろてをり」(27ウ)

ます。二四八とゆへバ、とはしらのりをゆうてあるとの事でござります。それで、いまに、をもしこふをあたへて、もらへましても、とはしらの神がごしこふして下さるさかいに、とふ日みにもつとをしやるのであります。そのこふのでけるときハ、

二四のりではじめくださりた。このりでは、をんなのまいのどぶぐハ二寸に四寸なからん」(28オ)

まれでゞ、しにいくときハ、二尺に四尺のやきあなへ、ほふむるとの事であります。またハ、そのやのやかたハ、二間に四間むしよふとふやでと、ハれへハきかしてもろてをります、みなさんハ、さよな事ハよくごしよふちでハございまよが、ハれへハ、これまれ、うかへしてをりましたので、まことに、こんにちになりまして、どふも、をやさんにもふしハ」(28ウ) けがございませんが、こんにちハこれでをひまもらいまして、またこんどのたびに、こそふたんいたします。」(29オ)

養徳院、これもたすけ一条

こんにちの、ふうじんくハいをむすんでくださりたと、をしますものハ、ほかやございません。ハたくしハ、ハかりませんけれども、このみちはじめてくださりたんハ、きよそふさん。このきよそふさんハ、をんなのをかたであります。そのをんなのいんねんのすじから、ハれへまでも、てびきをして、こほんぶのふうじんとして、くハいをむすんで」(29ウ)

くださりたものとももいます。さすれば、こんにちの、このふうしんくハいをつとめてくださるハ、うかへとハしていられますと、をもいます。きよそふさんの、そのすじひいたる、をくさまが、くハいちよとをなりくださりて、よふとくいんを、ごしんばいをくださります。これもたすけいちじよふであります。そのなかい」(30オ)

ハれへまでも、くハいこんでもろてをると、をもてよろこんでをりますしたいでごだいます」(30ウ)

心の身代をつくれ

ハれへハ、なにもハからんものでごだいまするが、一寸みなさん、こそふだんもふします。この神さまのをしへハ、きかしてもろてをりますのハ、みなさんごしよふちのとふり。このみちハほかやござりません。神さまのをふせハ、だいちにハ、心なをしの神、たゞせいしんさだめの神との、をしへの事あります。さすれば、せいしんも、どんなせいしんもごだいます。」(31オ)

そこで、ハたくしのとりかたが、ちごふてあります。にんげんの、かつてのゑほふへ〔勝手の良い方へ〕とりましたのが、心まちがへて、ハたくしハ、しぶんのゑほへはか、よふとりませんので、をきにハれへハなんぎいたしますが、みなさんハそんな事ハございませんやろをが、このみちハ、かねをためるせいしんをさだめよとも、よいきものをこしらへるせいしんをさためよとも、ゆハしやるのや」(31ウ)

ごだいません。たゞ心のしんたいをつくれ、心のしんたいさいか、つくれたなら、それがしんたいよし、しんしよふよしやでと、をしやる。そのしんの心のまこと、まごゞろのしんたいをつくる事を、よふしらす〔知らず〕して、にんげんのよいほふのしんたいつくとをもへましたのが、をもへそこないで、をふきになんぎいたしてをります。ないをしてなんぎいたしますが、どふど」(32オ)

とりかたを、ちがはんよふに、をもしそこないのいよふに、しんしよふのつくりそこないのいよふに、よろしくをたのめをします。」(32ウ) 以下、短文あるが1丁分略す。

次に、東田りん「御神名登八埃」を翻刻しておこう。東田りんは、郷母分教会（現大阪市）の礎となった方である。女性の布教師、教会長は少なくないが、女性がこうした文書を残しているのは珍しい。この文書の特徴は、十柱の神の守護、及びほこりの説き分けが、詳しく記されているところにある。明治10～20年代にかけての文書に、このように詳しく記されたものをみかけたことはない。一派独立を経た明治44年という時期を考慮に入れれば、そこに教理説明の時代的な展開と変化を読み取ることができるかもしれない。人間身の内は神からのかりものであるという意味内実が、この十柱の神の守護にあることを明確に述べていることに、注目しておいてよいだろう。

國常立乃命

くにとこたちのみことさまわ、人けんみのうちでわ、めいどう、うるをいの、ごしごうをくだされますをん神様でござります。めいと、をふせくだされますわ、どんないろしなもみわけさして戴きますもの、せかいをみはらして戴きます事の理を、めいとをふせくだされますのでござります。どうと、をふせくだされますのわ、かしらのて」(1ウ)

へんより、あしのつまさきまでのことを、どうとをふせくだされますのでござります。うるをいと、おふせくだされますのわ、みいと水と、にちへよばれるしよくじとの事を、うるをいとおふせくだされますのでござります。めいどう、うるをいのごしごうと、きかして戴きましたら、めいのみとくと、國常立の命様の水のみとくと、をなし理とおふせくだされますのでござります。」(1ウ)

どふ、うるをいと、おふせくだされますのと、水のみとくで、よろづのものをできさしてくだされます、ますのでござります。こふきかして戴きますれば、からだわ、まるで國常立の命様のものをかして戴きまして、人間御神様より、かりておりますものでござります。人間をおこしらゑくだされますにつきて、をやしないものに、きせて戴きますもの、すみかさして戴きます」(2オ)

ところから、よふきぐらしをさして戴きますにつきてわ、よろづのものがいらすから、國常立の命様ハ水一さいつかさどりくださると、おふせくだされますのわ、野のりうけ、山のそうもく、せかいにありとあらゆるものに、はのできさして戴きますものもござりますれば、できさして戴きませんものもござります。はなをさかして戴きますものも、ござりますれば、さかして戴き」(2ウ)

ませんものもござります。みのらして戴きますものも、ござりますれば、ならして戴きませんものもござります。あじのできさして戴きますものもござりますれば、できさして戴きませんものもござります。水のなかでできさして戴きますものも、ござりますれば、土のなかで、できさして戴きますものもござります。つちのうゑを、はわして戴きますものもござりますれば、たか」(3オ)

きにならして戴きますものもござりますれば、一年そうのものも、ござりますれば、まいねんをなじ木からめがでゞ、おふきなして戴きますものもござりますれば、みをならして戴きます

木もござります。これわみな、水がねへとおなりくだされまして、できさして戴きますことわ、たれ一人もしりなざらんをかたわ、ござりません。けれども人げんわ、はるになりますれば、めがでけ」(3ウ)

さして戴きますと、もうさして戴きますようなことや、あめがふらして戴きませねば、いろへものもやけまして、できさして戴きます事ができませんと、もうさして戴きますことぐらいわ、おぼへさして戴いてをりますけれども、水のをかげで、できさしていゞいてをりますと、もうさして戴きます。をんをおもわして戴きます、ものわござりません。水ハあめ、たにがわの水、なが」(4オ)

れ川の水と、をなりくだされ、いど水と、をなりくだされまして、御神様のごしんせんの水となり、おやしないの水となりて戴けば、ふじようばのすまゝで、をまわりをして戴きまして、よろづの事わ、にちへに水のおせわになりております事を、水一さいつかさどりてくだされますと、もうさして戴きますのでござります。この理を、こころにおさめさして戴きませねばなりませんものでござります」(4ウ)

面足の命さま

面足の命様わ、人間みのうちでわ、ぬくみのごしごうくだされます御神様でござります。ぬくみとおふせくだされますわ、人間みのうちにして、ちのことをおふせくだされますのでござります。ちのあかいともうしますのと、せかいの火のあかいのもうしますのと、おなしりいとおふせくだされますのでござります。ちいをかよわ」(5オ)

して戴きますところにわ、ぬくみがござりますのと、せかいに火のごしごうをして戴きますところにわ、ぬくみがござりますのと、おなしりとおふせくだされますのでござります。ちのかよわして戴きますところわ、どこにかぎらず、こころにおぼへさして戴きますのと、ひるわ日様のおてらしくくだされますところ、よるわ、ひをともしさして戴いております」(5ウ)

わ、なにゝよらず、みせて戴きまして、こころにおぼへさして戴きますのと、おなじりとおふせくだされますのでござります。人間のからだわ、月日様のもので、すいきにぬくみのごしゆぐうで戴きまして、いきをさして戴いてをりますので、人間わ、いきまで月日様のものを、かして戴いてをりますのでござります」(6オ)

世界でわ、火一さいつかさどりくだされますと、おふせくだされますのわ、せかいにありとあらゆるものわ、日さまのぬくみでせいじんさして戴いておりますことわ、どなた一人もしりなざらんおかた、ござりませんのでござります。いま人がもうさして戴いてをりますのわ、おふきな木の下や、山のかげ、村のかげになりますところわ、めのだして戴きますのがおそい。は」(6ウ)

のできさして戴きますのがおそい。はなをさかして戴きますのがおそい。みをならして戴きますのがおそい。あじをできさして戴きますのがおそい。あかくならして戴きますことまでも、おそいと、もうさして戴いております。

(以下次号)